



OPEN
YOKOHAMA



ひと、まちがつながる
住まい方、
考えてみませんか？

ひと、まちがつながる
住まい方、
考えてみませんか？



10年後、20年後、私たちはどんな暮らしをしていると思いますか？
 環境問題、人口減少、高齢化など、今後さまざまな社会的課題と向き合っていかなければいけない私たちにとって、今できることは何か、一緒に考えてみませんか。
 本誌では、横浜でひらかれた「スマートな住まい・住まい方カフェ」の講義とダイアログをもとに、横浜らしいスマートなライフスタイル、心地よい暮らしを探っていきます。

暮らしを考える
 ダイアログをはじめましょう

スマートな住まい・住まい方について考えるとき、私たちは未来のことをあれこれ想像してしまいます。スマートという言葉には、未来につながる革新的なイメージがあるからでしょうか。

今回、横浜で開かれた市民参加型のダイアログ「スマートな住まい・住まい方カフェ」(H26年10月～H27年2月開催)でも、これからの未来の暮らしは大きなテーマとなりました。さまざまな社会的課題を前に、私たちはどう暮らししていけばいいのか？

その答えは多様です。がまんしないエコな暮らし。どこかほっとするような温もりを感じる暮らし。人が主役で、みんながつながっているまち。人がまちの原動力となって、未来をつくっていく…。横浜らしいスマートな暮らしのあれこれが、見えてきました。そして住まいのリノベーションも大切なキーワードの一つです。

本誌では「スマートな住まい・住まい方カフェ」で導き出されたさまざまなキーワードをご紹介します。皆さんと一緒にこれからのスマートな暮らしを考えていきます。ご家族や仲間と一緒に、これからの暮らしを話し合うきっかけ作りとなりますように。

スマートな住まい、住まう方って？

おばあちゃんの味を みんなでシェア!

ゆったり、のんびり、くつろげる、築42年の古い家。

おばあちゃんのいるシェアハウスには、いつの間にか私たちが忘れていた懐かしさがあります。

古くて新しい住まいの価値観は、住む人にも、そしておばあちゃんにも、心地よさをもたらしているようです。



おばあちゃんの温もりが
住まいの価値を育む

「僕、おばあちゃん子なんです」とは横浜・菊名でシェアハウスを運営する酒井洋輔さん。6室の単身用住居を備えたシェアハウスは、週に3回、おばあちゃんの手料理を出すほか、家事サービス付きで話題に。

「巷ではシェアハウスのオシャレな物件も増え人気ですが、もっと和める空間が欲しいと思ったんです。そのために必要なのは何かと考えたときに、そうだ、おばあちゃんの味だ、と」

おばあちゃんを付加価値とすることは、経済面でも大きなメリットに。菊名のこの物件は、駅にも近い65坪の敷地を持つ戸建住宅をリノベーションしたもの。地価から見積もれば8千万円以上はする物件ですが、ローコストでシェアハウスが実現しました。

「築42年の古い木造建築ですが、その持ち味を生かせるようになるべく元の建築を生かしたリノベーションを行いました」

昔のまんまの傷ついた柱、年季の入った木の床は、あえてそのまま残してあり、本当におばあちゃん家に遊びに来たような、ほっこり和む優しさがあります。

「柱に背比べの跡が残っているでしょう? ここにしていると家そのものが家族の思い出なんだなあ、って思うんですよ」とおばあちゃん。

世代を超えた交流が
おばあちゃんの元気のモト

またこうした取り組みは、雇用される側のおばあちゃんにも、幸せの相乗効果をもたらしています。

「週に1度、みんなが顔を合わせて食事したり、交換日記で若い人たちと交流したり。そんななかで働けることは、私にとっても人生の励みになります。夫と二人暮らしのわが家では、めったに。ありがとう。なんて言われないけれど、ここに来るとみんなが『ありがとう』って声かけてくれて。本当に、私はなんて幸せなんだろうとうれしくて」

世代を超えた交流があるシェアハウスは、実は古くて新しいこれらの住まい方なのかもしれません。



酒井洋輔

「住まいの松栄」専務取締役。同社二代目として、不動産業に加え、ソーシャルな新事業を手がける。2015年3月には古民家カフェ「ハグカフェ」を妙蓮寺駅前にオープン。

みんなに“ありがとう”って言われるのが、本当に幸せ



おばあちゃんこと井野純子さん。おばあちゃんの作るご飯は、おいしいとみんなに評判。住人たちから届くありがとうの感謝の声は「毎日の大きな励み」になっているそう。

ごはん、おいしく
できたかな?



朝一番の仕事はパパッと洗濯

ふきんなどの共有物のお洗濯もおばあちゃんの仕事。庭先の物干し竿にズラッと並ぶ洗濯ものの風景も、なんだか懐かしい感じ。



夕飯のメニューは、献立当番の住人が考えたものを作ります。今日のレシピは白身魚と野菜の和え物。家事は直接入居者がおばあちゃんに頼むシステム。

「こんなもの使うの、初めてなんです!」と悲鳴をあげながらも一生懸命iPad miniで写真を撮るおばあちゃん。"シュシュッと携帯"=iPadで撮った写真は、酒井さんに教わりながらインスタグラムにアップしています。

伝言は、
交換日記と
"シュシュッと携帯"に



シェアネスト東横

男女6人が、6LDKの邸宅をシェアしている賃貸住宅。空気が出るとうまくしまってしまうほどの人気ぶり。おばあちゃんの味と、木の温もりを残した家とカジュアルなインテリアが心地よい。最寄り駅は東横線菊名駅。



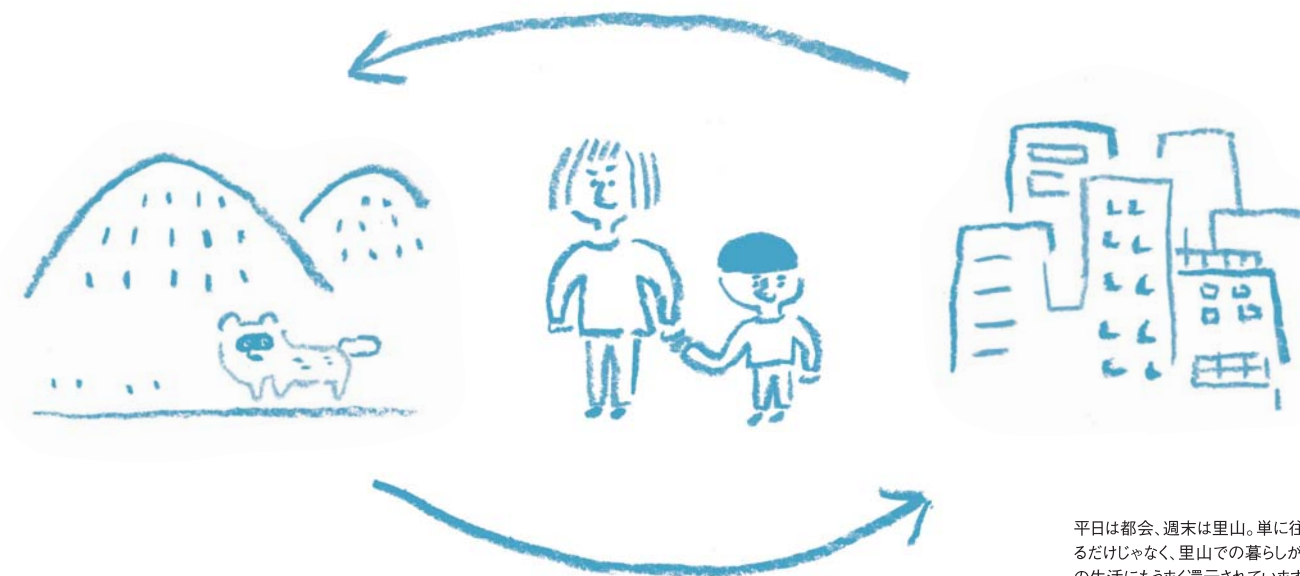
古い家には、 思い出がつまっています

柱の傷や、玄関まわりの壁など、あえて古いまま残しています。その古さがかえって新鮮で、和みます。リビングには住人みんなの記念写真も飾られていました。



都会×里山、 いったり来たりの 子育て

子供と一緒に、自然の中で感性を磨く楽しさ。都市に住む私たちには、少し贅沢に思えるようなことも、ちょっと頑張れば実現できるんです。都会に住みながら、週末は田舎暮らしを満喫している、馬場末織さんに、二地域居住で得たかけがえのない体験を伺いました。



平日は都会、週末は里山。単に往復するだけでなく、里山での暮らしが都会の生活にもうまくだ元されています。

週末里山暮らしの 大きな収穫

「子供たちに田舎がつくりたくて」都会に住みながらも週末は南房総で過ごすライターの馬場末織さん。子育てをきっかけに田舎暮らしを決意した馬場さんは、2007年に南房総に8700坪の土地を格安で購入し、里山暮らしをスタートしました。平日は東京で仕事、週末は南房総へ家族で移動する二地域居住です。自由な発想で移動さえも楽しめれば、暮らしはもっと豊かになります。とくに子育て中の馬場さんにとっては、感性を育むことができる田舎暮らしは魅力でした。田舎での体験を都会暮らしにフィードバックしながら、子育て、仕事を充実させてきたのです。

仲間や地域の人々と 交流する楽しみ

しかし田舎暮らしは、都会のように便利なわけではありません。「敷地の草刈りや農地管理、イノシシ被害の対応など、自然の中で暮ら

するために必要な作業がこれほどあるのかと驚きました。そんな中で、春は野草の宝庫となり、夏は川で泳ぎ、秋は収穫を喜び、冬は山の整理をしながら焚き火をしたり。日々の暮らしは発見そのものでした」そうした作業を、育児と仕事をこなしながら続けるには、さまざまな奮闘があったに違いありません。そんな馬場さんを支えてきたのは、家族や仲間たち。南房総では、NPO南房総リパブリックを設立し、仲間たちと里山学校などの自然学習を行ってきました。また、地域の人たちとも交流するように。



馬場末織

建築ライター、NPO法人南房総リパブリック理事長。2007年より家族5人で週末は南房総市の里山で暮らす二地域居住を実践している。著書に『週末は田舎暮らし』（ダイヤモンド社）。



子供たちに田舎を作りたくて
ここへ帰ってくるんです

In The Country

ウッドデッキは 一番のお気に入り場所

里山の風景が見渡せるウッドデッキは、家族みんなのお気に入りの場所。ここでお茶をしてくつろいだり、子供たちとおしゃべりしたり。心地よい時間が流れます。



見つけたゾ！
森には発見が
いっぱい

馬場さんが主宰する南房総リパブリックでは、動植物専門家の指導者とともに自然学習やワークショップなども行っています。子供たちと一緒に森を歩けば、いろんな発見が。



早く、お山に
行きたいな

都会の真ん中で暮らす馬場さん一家。ベランダで家庭菜園をするなど、暮らしに緑を上手に取り入れています。また猫2匹とさまざまな生き物もいるそう。



In The City

NPO法人南房総リパブリック

大人も子どもも自然を深く学び、体感することを目的に作られた「里山学校」をはじめ、農家さん訪問ツアーや里山デザインワークショップなど多彩なプログラムを実施。
<http://mb-republic.com/index.html>



都会では仕事も頑張ってます

平日は建築ライターとして、さまざまな仕事をこなしている馬場さん。週末の田舎暮らしのリフレッシュが、馬場さんの感性となってフィードバックされているそう。



ひとから街へ つながりのデザイン

あなたにとって、大切にしたい場所、つながりのある場所はどこですか？
住まいのご近所？ 職場周辺？ それとも……。
都市にいとつい希薄になりがちな、街や人との関係について
吉澤卓さんのお話を聞きながら、みんなで意見交換しました。

つながりの成立条件

- ・互いに顔を合わせ、
声をかけあう場がある
- ・地域共通の目的があり、
参加の機会がある



隣は何をする人ぞ？
人をつなげる仕組み作り

隣に住んでいる人の顔さえ知らない……。都会のマンションの閉塞感
は、しばしばこんな言葉で表されて
きました。

「でも人間関係を作ることは、マン
ションをより住みやすくするため
にも必要なことです。人間関係を
作っておくことで、何かするにも合
意形成がしやすくなり、快適な環境
が作られるようになります」

具体的には、住民同士の「あいさ
つ会」を各棟で行っています。居住
者同士が顔を突き合わせる場を作
ることで、コミュニケーションを促
します。またマンション内で主体的
に動いてくれる人を見つけるため、
イベントなども行っているとか。そ
うやってマンションを一つの組織
に見立て、プレイヤーを探し、人
と人のつながりを仕掛けることで、あ
とは自主運営を促す……。という手
法は、マンションに限らずコミュニ
ティ作り全般に応用できることか
もしれません。

実家というもう一つの
地縁とのつきあい方

地域の資源、人とのつながりを大

切にする暮らし方、ローカルファ
ーストの選択肢の一つとして、実家の
地縁も大きな課題です。実家をリノ
ベーション中の吉澤さんは「今まで
ずっと離れて暮らしていた実家で、ど
うやって地域とのつながりを作っ
ていけばいいのか。それは今後の課
題ですね」と話します。

マンションに比べて、より地域と
のつながりが日常で求められる戸
建住宅では、自治会というの昔な
がらのコミュニティのあり方。
「お祭り、防災訓練など、自治会では
共通の目的があってつながりが生
まれます。私の地域では、自分を含め、
外部からの移住者も積極的に自治会
参加することで地域のつながりを
作ってきました（コーディネーター
東みちよ）」

ただし自治会運営に関わってい
る人たちの高齢化も進んでいるた
め、それももう一つの課題です。



吉澤卓

ステップチェンジ（株）プロ
デューサー。開国博 Y150 ヒル
サイドや、イマジン・ヨコハマ
などの市民参加事業などに関
わったあと、マンションにおけ
るコミュニティ支援を行う。

住まいのまわりをどうしたら
大切に思えますか？

「住んでいるところがローカルと思えない」という意見も
多く聞かれた今回、住まい方カフェの参加者たちに解決策を聞いてみました。

自然や建物が
ごちゃごちゃ混在している方が
親しみやすい。
整然とした町は違和感がある



ローカル線があると
地域への愛着が増す

昔の町並みを知り、
景観の移り変わりを
理解すると愛着が増す



子供が育つ
場所として考える



水辺の
文化を育てる



©水辺荘

*ローカルファースト：米国の地方都市で盛ん
となった地域の購買運動が発端。ローカルス
トアで買い物することで地元経済に還元できる
という調査のもと運動は発展した。ここでは、
地域の資源、人とのつながりを大切にするライ
フスタイルのあり方として使われている。

さまざまな意見からは、今住んでい
るところの資源の掘り起しの可能
性と、そこに住み続けるために必要
なことの輪郭が見えてきました。街
づくりを考えるとき、私たちはつい
俯瞰して考えてしまいがちですが、
個人の経験や身近な場所から、見
て、感じることも大事。実は身近な
テーマ、エモーショナルな行動か
ら、ローカルファースト*の成立条件
である人と人とのつながり、地域と
のつながりが生まれ、それが住まい
や街の課題解決へとつながること
もあるのです。

コーディネーター 東みちよ

関係性 II 社会資本

人と人とのつながりから、
場と資本が生まれる

「昔だったら地縁から、人と人とのつながりが生まれていましたが、今は何かテーマがあつてつながりが生まれる。そんな風になつてきていると思います」と博報堂ブランドデザインの兎洞武揚さん。これまで数々のコミュニティ支援を行ってきた経験から、まずは人と人が集う場の作られ方について語ってくださいました。

「あるテーマや課題のもとに人が集まり、場が必要となる。それがいわゆるサードプレイス、つながりの場所の作られ方です。私が思うに、最初に場があるのではなく、関係性が先にあるんですね。そうした人と人との関係性は、社会資本としても機能するのです」

住みびらき、から始まる
ダイアログ

サードプレイスは何も特別な場所とは限りません。暮らしの場である自宅も、みんなが集まる学びの場に変えることだってできるのです。「私は自宅に仲間を集める。ウーカフュ」を2年前から行っています。

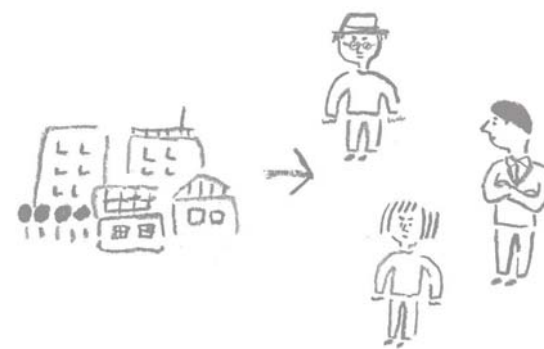
組織内個人として
好きなことをやる、
情熱を傾ける

の教育を、なんとかしようという仲間たちで始めた、未来教育会議*のの一つ。こういう仕事の作られ方、動きも、今後は増えていくかもしれませんね」

組織内個人になろう
イマジン・ヨコハマのその後

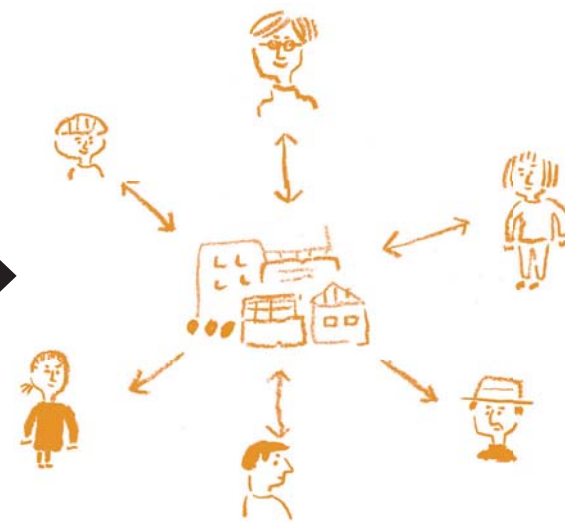
兎洞さんがこれまで手がけてきた仕事の中でも、「イマジン・ヨコハマ」は私たちの記憶に残るイベント

To Cモデル



広告・宣伝型コミュニケーション
市民は“ターゲット”

With Cモデル



参加型ソーシャルブランディング
市民や関係者は“仲間”

これまでの街作りは、to Cモデル、行政から市民へと情報を発信してきたが、これからは市民と一緒に作っていく、with Cモデルへと変化していく。コミュニティは単に場所を提供するのではなく、そこに暮らす人たちと一緒に作っていくもの。



兎洞武揚

組織開発ファシリテーター。博報堂ブランドデザイン副代表。これまでイマジンヨコハマ、相模大野宣伝部など、市民のダイアログを通じてコミュニティ支援を行ってきた。

*未来教育会議：教育業界、民間企業、地域、行政、さまざまな主体が立場を超えて一緒に、これからの教育を考えるプロジェクト。創造性や、国境を越えた思考等を備えた人材を育成する。

モノよりコトをつくる

人生で大切なのは、モノとしての住まいじゃなくて、
これからの暮らしを心地よく変えていくコトができる、住まい。
内山博文さんに住まいと住まい方を見直すための、3つのコトを伺いました。



余白のある家

上／合板や無垢の木材を使った室内は、まるでキャンバスのように想像力をかきたてます。ペイントや工作も自由自在。下／仲間を集めてDIY。壁のペイントも家作りの一大イベントに。その分、コストも節約できて一石二鳥。



家をキャンバスにして楽しむ、これからの住まい方

わが家を持つことを目標にするのではなく、これからは家をどう住みやすく変えていくか？ が大事だと内山さん。手掛けてきた数々のリノベーション物件では、余白のある家づくりを提案してきました。「価値観の多様化によって、住まい方は大きく変わってきています。作り手である施工者は、まずそこに住む人がどんなふうに住みたいか？一緒に考えることが大切だと意識しなければ。そのために私たちはリノベーションで住まいを提案する際に

は、スケルトンに近い状態でシンプルに仕上げる人が多いです。そうやって家に余白を残すことで、そこに暮らす人の考える楽しみが生まれるのです。一緒にDIY体験してもらうために工具をお渡しすることもあります。ユーザーリテラシーに訴えるモノ作りのほうが、合理的で満足度も高いのです」

またリノベーションは、経済面や環境面でもメリットが。古い物件を改修して住むことで、新築を建てるよりもコストもCO2排出も抑えられると言います。そんなシンプルで合理的な住まい方を、ぜひ家族と一緒に考えてみては。

コミュニティ作りを後押し団地リノベの取組み

集合住宅においては、新しいコト作りもはじまっています。その一つがリビタが企画から運営管理を行うUR団地をリノベーションしたシェア型賃貸住宅「りえんと多摩平」。シンプルな共同住宅の設計により、地域コミュニティの形成を後押ししています。

「ここでの課題は、共同住宅の住人がいかに地域とつながるか、ということでした。そこで地元民と住民を結び付けるイベントを行ったり、住民同士のつながりを深める仕掛けも作りました。それが部屋に水回りを置かないということ。キッチン、洗面などを共有することで、さまざまなつながりが生まれています」

2

水まわりのない集合住宅



右／UR団地をリノベーションしたシェア型賃貸住宅「りえんと多摩平」の外観。中／キッチンは共有スペースになっている。あえて部屋におかず共有とすることで、住人同士のコミュニケーションが生まれる仕掛け。左／庭のデッキは、住人同士が集まるのにちょうどいいコミュニティスペース。イベントなども行われている。

ポートランドのDIY主義

ポートランドでは、住まいのDIYはもはや当たり前で、パーツを揃えたウエアハウスもあちこちにある。



地域と人を重視した、都市の多様性とは？

まちづくりの事例として、内山さんがいま注目しているのは米国ポートランドの取組み。

「地域を大事にする、ローカルファーストとは何か？ と思ったときに参考になるのがポートランドのまちづくりです。都市計画においては地域性を重視し、ショッピングセンターなどにもローカルブランドを優先させるなど徹底しています。大型建築はすべてLEED認証が求められる、一方で古い建築など

とも共存しています。住宅のDIYも盛んで、街にはDIY用の建材を揃えたショールームもあります。住まいは自分で作っていく、家は住むための道具であるという意識が高いのです。ポートランドの街全体から、街と人とが心地よく調和している空気が感じられます」



内山博文

株式会社リビタ常務取締役。一般社団法人リノベーション住宅推進協議会会長。リクルートコスモス、株式会社都市デザインシステムを経て現職。趣味はサーフィン、ランニング。

＊LEED認証：建築物全体の企画・設計から建築施工、運営・メンテナンスまでにわたって省エネ、環境負荷を評価するもの。米国グリーンビルディング協会が実施。

みんなで考えた スマートな 暮らし方とは？

2014年10月から約5カ月間にわたって開催された「スマートな住まい・住まい方カフェ」。
毎回、さまざまなゲストを迎えたセミナーのほか、グループごとによる
参加者同士の積極的な対話も繰り広げられたこのイベント。全5回のダイアログから
見えてきた、市民一人ひとりにとっての“スマートな暮らし方”を探ります。



毎回、住まい方にまつわるテーマのもと、意見交換が行われた「スマートな住まい・住まい方カフェ」。イベントには、会社帰りの人、地域で活動する人などさまざまな人たちが参加。セッション時には、グループに分かれて活発に議論が交わされました。和やかなムードのなか行われた対話からは、十人十色のスマートな暮らし方が見えてきました。

自分にとって 愛着の持てる場所は？

最初に話し合ったのは「自分にとって愛着が持てる場所は何？」ということ。参加者からは、「小さい時の住んでいた場所の記憶」「子供の頃の匂い、音」など、感覚的なキーワードがあちこちから飛び出しました。それらは「ふるさと」的な感覚ともいえるでしょう。一方「話せるお店、顔が見える場所」という、人と場所が一体化した対象もありました。また「近所の人から野菜をもらって、地域に愛着を持つようになった」「古いものと新しいものの融合」「自然の多いところ」などの意見は、まさに古い建築が混在し、自然が残り、畑などの農も盛んな横浜ならではの、さまざまな意見からは、多様性こそ、愛着を持つために必要な条件かもしれないということが見えてきました。

もう一つの「ライフ」の つくり方、楽しみ方

「自分にとってのセカンドライフは何ですか？」

ゲストで登壇した馬場末織さんのように、もう一つ別の住まい方を模索する対話も行われました。田舎と都会を往復する暮らしには、憧れる人も多いけれど、実際にはなかなか実行できないというのが現状。そんななか「平日は仕事で横浜、休日は東京で過ごす」「旅行」「実家で過ごす時間」……などの意見も。距離の差こそあれ、自宅ともう一つ別の場所との往復によって、日常と非日常を楽しむ住まい方もあるようです。距離は、住まい方を切り替えるための装置にもなるのです。

また「職場で盆栽カフェをひらいている」「自宅の空きスペースを使って、コミュニティカフェにしている」など、自宅や職場で、日常とは別のもう一つの空間を生み出している人たちもいました。今住んでいる場所働いている場所も、テーマ設定をすることでまったく別の機能が生まれます。住まい方を少し工夫することで、もう一つの「ライフ」が実現可能なのです。そんな暮らしに共感する人たちからは「シェアハウスをやってみたい」との提案もあり、家を提供する人、活用したい人が手を挙げ、その場で盛り上がるというハプニングも。

菜園を
使いつくす

断捨離
+
愛着

自分らしく
いられること

ダイニングの
コミュニケーション
から作られる
あたたかい暮らし

目指せ！
楽しめる
セカンド
農家ライフ

横浜の水辺に
みんなの(自分の)
別荘がほしい

公私混同
一石二鳥

「そして、人が中心。 スマートな暮らしは 自分で考えつくっていくもの」

スマートな住まい・住まい方カフェ
会期:2014.10~2015.2 会場:tvk会議室、BUKATSUDŌ
Facilitator=松野智義仁(tvkコミュニケーションズ)
Moderator=佐々木龍郎(佐々木設計事務所)
Coordinator=東みちよ(一社スマート・ウィメンズ・コミュニティ)



smart workshop



「古いものと新しいものを 両立させた暮らしをしていきたい」

スマートな場づくりから 次の一歩へ

金曜夜の大人の部活動のごとく、続けられてきた「スマートな住まい・住まい方カフェ」。最終回は、一人ひとりが自分なりの「スマートな暮らし方」を一枚の紙にまとめるという編集会議が行われました。

「サステイナブルな『うちカフェ』をやりたい。おじいちゃん、おばあちゃん、パパ、ママ、いろんな人たちが各自の得意なものを資源として持ち寄ってワークシヨップを開きたい。地域で支え合うコミュニティを、もっと気軽に家でできるようにしたい」

「横浜の水辺に別荘が欲しい。横浜の水辺は貴重な資源。ここを活かして居場所を作り、地域を盛り上げたい」

「青葉区で家庭菜園をやっています。今は趣味でやっているのですが、野菜作りをもっと発展させたい。保存食を作って分けあったり、野菜を通じた地域のつながりを作りたい」

すでに自宅で、地域で、何かしらアクションを起こしている人たちからは、次の一歩につながる場づくりの提案がありました。そうした人たちが多く集まっているというのも、横浜ならではの面白さ。進取の気性に富んだ人的資源と、それに応えられるだけの環境が揃っている横浜では、スマートな場づくりの機運が広がっているのを実感しました。

古いものと新しいものから 価値を生み出していく

印象に残った意見としては「断捨離によって古いものを捨てつつも、愛着のあるものは残し、古いものと新しいものを両立させた暮らし方をしていきたい」というのがありました。そこにはリノベーションの考えにも共通した概念が感じられます。古い建物のいいところは残しつつ、リノベーションによって心地よい空間に変えるという。これと同じように暮らし方も、古いものと新しいものを両立させることで、自分にとって心地よいものが作られるということのエッセンスを5回のセミナーから学んだように思います。

もちろん、価値観は人それぞれですが「古いものと新しいものの融合」に関しては、初回からたびたび語られてきました。それは例えば、内山博文さんが紹介した「古い建築を残し新しい建物と混交させることで街に多様性が生まれる」という都市評論家ジェイン・ジェイコブスの言葉にもありました。今後、さまざまな社会的課題と向き合いながら、住まい方を探していくうえで、こうしたキーワードは存在を増していくことでしょう。そして大事なことは、人が中心。スマートな暮らしは自分で考え、つくっていくものであるということ。

さて、あなたなら何をしますか？ さっそく家族とダイアログをはじめてみては。(コーディネーター 東みちよ)





上／金沢シーサイドタウンの「3636+」は、押し入れ部分を有効活用。東急ハンズのキットでカスタマイズ。問い合わせはUR賃貸金沢シーサイドタウン ☎045-776-3350 下／横浜市のエコリノベーション事業で改修。玄関を入るとすぐに土間が広がる。

ローコストで 楽しめるリノベ住宅

創造リノベーション

data

横浜市では今後、2030年には築40年以上の住宅が約5割になると予想されています。古い家をどう快適にしていけるかは、住む人次第。間取り変更や省エネ改修など、さまざまな事例を参考にリノベーションのこと、今から考えてみては。

「築30年以上の古い物件でも、上手にリノベーションすればとっても快適。広さのわりには手頃な価格で住めるのもいいですね」（金沢区・Mさん）

リノベーションによって古い家を自分らしく作り変える、そんな住まい方が横浜市内でも始まっています。自宅に人をちよっと招き入れるスペースとして「土間（写真左下）」を作ったり。人気インテリアショップによるプロデュースによって、若い世代が共感する部屋にしてみたり。断熱性や通風だって、新築に負けません。

住まいをITでつなげば 省エネ習慣が家族の楽しみに

HEMS



パソコンやスマホにつなげば、家の場所ごとの電気使用量が一目わかります。家族と一緒に省エネ対策を考えるきっかけにもなります。

HEMSってご存知ですか？ 家庭で使うエネルギーを賢く管理するシステムのこと。電気の消費量などを計測し、家庭をITでつなぐことでエネルギーを「見える化」し省エネに役立てます。横浜市ではHEMSを家庭で使う実証実験も行われていましたが、そこでわかったのは、参加者の9割で節電意識が向上、または電力使用量が減少したということです。

「HEMSを入れたら、今まで気づかなかった電気のムダもわかるようになりました。省エネは日頃から意識していましたが、なぜか洗面所の電気使用量が増えていて。あれ？ 思ったらドライヤーだったんですね。HEMSは家の場所ごとの電気使用量がわかるから、具体的な節電対策もできます。家族と節電会議するのも楽しいですね」（神奈川区・Aさん）

街と人をつなぐ ちっちゃなモビリティで横浜巡り

チョイモビ ヨコハマ



横浜市内の約60カ所のステーションで貸出返却ができます。ただし乗るには普通車免許と会員登録が必要です。問い合わせはチョイモビ ヨコハマ運営事務局 <http://www.choi-mobi.com>

みなとみらい、関内、元町などのベイエリアでは、ちっちゃな電気自動車、「日産ニューモビリティコンセプト」を使ったカーシェアサービス、チョイモビヨコハマが活躍中です。

「乗る街づくり」、低炭素交通をキーワードにスタートした実証実験は、横浜市と日産との取り組みにより進められ、モビリティと街とをつなぐ、さまざまな交流も生まれています。ちよっとコレを借りて街を移動すれば、今まで気づかなかった街の魅力を発見したり。コンパクトだからこそ、街と人の距離が近く、エコな乗り物だからこそ気軽に活用したくなる。そんなモビリティを暮らしの中で活用すれば、街がもっと楽しく感じられるかもしれません。



横浜でスマートに暮らすヒント

環境未来都市・横浜ならではのスマートな暮らし方。すぐに参加できる、実践できるエコな暮らしの情報から、今後の住まい方に役立つトピックスまでご紹介しましょう。



YES(ヨコハマ・エコ・スクール)

エコな暮らしを考える 場づくり、仲間づくり



写真は市民団体によるYES講座。みんなでエコな暮らしの意見交換も楽しそう。

通称「YES」として市民に親しまれているヨコハマ・エコ・スクールは、『横浜で地球を学ぼう』をキャッチフレーズに各地で開かれる市民講座。環境・地球温暖化問題について、わかりやすい題材を使って街のあちこちで開催しています。

横浜市主催の講座だけでなく、市民団体による講座に気軽に参加できるのも、YESならではの楽しみ。また市民団体としてYES協働パートナーに登録すれば、自分で講座を主催することもできます。

「気になっていた暮らしの省エネも、講座の参加者同士で気軽に話せる機会を得て、新たな発見がありました。仲間も増えて、またぜひ参加したいです」（緑区・Nさん）

里山体験、市民の森

子供と一緒に里山体験! 都会で自然を学ぼう



新治市民の森で開かれた里山ウォーキング。「どんぐり見つけたよ」と子供たちも大はしゃぎ。



都会に住みながらも、身近に緑を感じることができるようにも横浜市ならではの魅力。市内には42カ所の「市民の森」のほか、「ふれあいの樹林」、「ふるさと村」など、多彩な緑に親しめる場があります。それぞれの場では、四季折々の自然が楽しめるほか、場所によっては子供と一緒に里山体験、農体験ができる講座なども開かれています。

「子供と一緒に、森の散策を楽しみました。ガイドの方から木の名前、植物の名前を教わり、里山にますます興味がわいてきました」（青葉区・Sさん）

土に触れ、自然の中で遊ぶということは、子供たちにとっては感性を磨く学びの時間。そして大人にとつては、リフレッシュの時間。週末は近くの森へ、ぜひ足を伸ばしてみてもいいですね。

data

市内にはさまざまな緑があります。野鳥観察会なども行われている「横浜自然観察の森」（米区）。里山の風景が残る「新治里山公園」（緑区）。懐かしい田舎の風景を楽しむなら「寺家ふるさと村」（青葉区）や「舞岡ふるさと村」（戸塚区）なども人気です。



STYLE BOOK team

Producer=Tokihito Matsuno (tvk communications)
 Editor=Michiyo Azuma (Smart Women's Community)
 Designer=Osamu Matsuzaki, Saki Kanbara (yd)
 Photographer=Takuya Neda (cover, P4)
 Illustrator=Jin Kitamura
 Publisher=Yokohama city climate change policy HDQ, tvk communications.

「スマートな住まい・住まい方カフェ」レポート
 2015年3月発行 <http://smart-sumai.jp>

「スマートな住まい・住まい方カフェ」は、横浜市と株式会社テレビ神奈川が締結した
 「横浜市とテレビ神奈川との環境未来都市実現に向けた
 住宅関連の取組の推進に関する協定書」に基づき実施しました。

株式会社テレビ神奈川 tel. 045-651-1711
 横浜市温暖化対策統括本部 環境未来都市推進課 tel. 045-671-4107
 編集協力:一般社団法人スマート・ウィメンズ・コミュニティ

